

徳永勇著 : 『ポスト産業社会-構造転換のダイナミックス』 : 勁草書房, 2001年, B6判, 178頁, 2,100円

園田, 浩之  
社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 : リサーチ・レジデント : 言説分析, 知識社会学

<https://doi.org/10.15017/920>

---

出版情報 : 人間科学共生社会学. 2, pp.167-170, 2002-02-15. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

徳永勇著

『ポスト産業社会 — 構造転換のダイナミックス』

(勁草書房, 2001年, B 6 判, 178頁, 2,100円)

園 田 浩 之

そもそも社会学で「産業社会」と呼ばれているフェイズの内実が、複数のジャンルにわたる、それも複数のプロセスの交差領域として存在するものである以上、それをめぐる論述は必然的に横断的で多岐にわたるものとなる。産業社会論は（従ってポスト産業社会論もまた）、資本主義化、近代化、情報化などの変化の特徴をそれぞれ含んだ固有の「問題領域」である。まさに著者がみずから述べるように「高度産業社会は、いま、情報化、サービス経済化、グローバルイゼーション、少子高齢化等々のトレンドが複雑に絡まり合い、巨大なマトリックスを構成している」(p.156 以下引用箇所は頁数で示す)。こうしてみると、各種メディアにおいて報じられるさまざまな社会事象の変調や社会問題の殆どが、その根本において、じつのところいま高度産業化として経験されつつある社会変動に関わっているともいえそうなくらいである。社会学が広い意味での「(ポスト)近代産業社会論」を手放さない(手放せない)理由のようなものがここにある。本書は、社会的分析が正面から試される主題ともいえる「(ポスト)産業社会」への真摯な対峙と、そこに孕まれた多様な問題群へのバランスのよい周到な目配りのもと「ポスト産業社会の構造変動を引き起こしてきた要因群と、産業構造の高度化の果てに顕在化している、またこれから顕れてくるであろう問題群を分析」(p. i) しようという試みである。

このように多様で幅広い射程を含んだ本書を、かたよりなく紹介し、また正当に批評する十分な能力を残念なことに評者は持ち合わせていないのだが、せめて本書の構成を頼りにしつつ、扱われている主題群を紹介したうえで、そこに若干のコメントを添えることができたならば、書評に託されているのだろう最低限の役割は果たせるのではないかと思う。

本書の構成と内容は次のとおりである。

「ポスト産業化と社会システムの再編成」(第一章)では、まず本書を貫く主題である「産業化」が歴史的に再構成されたうえで、経済成長・体制動員・大衆社会・プライベートイゼーションをキーワードに、それを高度産業化へと駆動する内生的要因が考察される。ここで、①人なみ・アメリカなみの達成とその徹底の結果生じる準拠他者の喪失としての「大衆の溶解」、②生活様式の物質的要素を商品化しつつした経済が、情動的機能による付加価値の自己増殖過程によってみずからを延命させていく姿である「サービス化する経済」、③対面的コミュニケーションにおける儀礼性や複雑さを溶解させながら、電子空間が、新たな生活領域として、また新たな社会集団の再編成の場として迫り出しつつある事態を意味する「電子の生活空間」と、

産業化の高度化として経験される三つの変動局面が把握される。終章と並んで、産業化の帰結をバランスよく俯瞰できる記述と、その問題性がどちらもの確に提示され、みずからを徹底し、自壊-再編成されていく産業化プロセスが張り出しつつあるフロンティアが描き出される。

「ライフスタイルとジェンダーの変容」(第二章)では、まず「高度産業化とミクロ-マクロ問題」として、理論社会学的問題との関連で高度産業化とライフスタイルの多元化が論じられ、「高度産業社会システムの自己維持と私的な意味世界の主体の析出」(p.28)という同時的な現象を高度産業化する社会システムのメカニズムとして記述する際、著者の依拠する方法論的概念となる「生活システム」について述べられている。それは「社会的慣習、過去の履歴に規定されながらも現在から将来にわたって持続する、生活者の欲求性向・生活態度・生活行動の、ある程度一貫した反復的継続的パターン、布置状態を表す」(p.29)概念である。このように定義された生活システムに定位することで、著者は、エスノメソドロジーや現象学派の多くが結局は微視的世界の意味構成の解釈へと閉塞し、マクロなシステムの機能要件充足とそれがどのように関連するのか(しないのか)を明らかにしてはこなかったという経緯を批判しながら、そのこと自体が「マクロな問題状況から私的領域への撤退の現れである」と診断する。対して生活システム分析は、マクロなシステム変動とミクロな意味構成という二つの異質なレベルでの運動が交渉しあう「相互補完、葛藤、対立、修正、均衡化」(p.28)の展開する具体的な生活位相への関心に貫かれることになる。同章ではまさにそうした方法論的=主題的関心から、高度産業化と相関変動するオルタナティブなライフスタイルが注目され、生活構造論的に重要な局面としてジェンダーの「ゆらぎ」と「再編成」が取り上げられる。

「社会的ネットワークの展開」(第三章)では、ポスト産業社会の自己変容を内部から駆動しているさまざまな「生活扶助ネットワーク」「協同の社会セクター」から、個人と組織の関係性の変容が捉えられ、フォーディズムの終焉、行政セクターの財政危機などを一因としつつ加速されるポスト産業化においてわれわれの生活の質を向上させる方針が、「出資者=参加者=(再)生産者=消費者協同の集合体」(p.98)として構築される新しいコーポラティズムの社会像、「協同経済社会」の可能性のうちに見出されていく。本章は従って、著者の分析視角をふまえた社会診断であり社会構想にもなっている。

第三章補論として置かれた「福祉供給の地域間格差」は、「高齢化しゆく社会での生活者のニーズの充足水準の地域間格差が、かつての「階級」間格差にとって代わって、人間の「幸福」の度合いを決定する最も重要な規定要因となる」(p.99)という問題意識にもとづいて、「その地域間格差を決定する地域社会の特性」(同)が、中国地方の高齢「先進」地域調査のケースから考察される。ここで扶助に関する社会的ネットワークのパターンと扶助役割の地域差が検討され、「自生的な人的ネットワークの福祉機能」(p.121)が注目される。補論という位置づけだが、この箇所の記述は、生活システム分析による筆者の方法論や問題意識が具体化されたものとなっている。

終章「ポスト産業社会のレギュレーション」(第四章)では、最近その著書の邦訳も出版された

ヨスタ・エスピン-アンデルセンの「脱商品化」(*decommodification*) という指標による福祉レジームの比較分析に触れながら、「ポスト・フォーディズムの社会においては、ケインズ主義的福祉国家が後退し、ボランティアも含めた福祉サービス部門の労働力の「フレキシビリティ」の拡大と福祉の多元化、混合化が進行する」(p.141) という診断にもとづいて、包括的な社会保障制度以降の社会における福祉労働の課題と可能性とが論じられる。その延長線上で、ポスト産業社会のシステムに適合的な「社会的アクターのリストラクチュアリング」(p.155) の必要性が説かれることになる。

ポスト産業社会論はこれまでも、サービス経済への重点移動、知識労働者の増大、情報による価値の創出、産業と文化の相互影響を、グローバリゼーション、高齢化、女性の社会進出、コンピューター通信の発達といった社会環境の変化のなかで主題化しながら、現状診断の向こう側に「来るべき社会像」を繰り返し提示してきたのだが、生活システム分析という方法論に依拠して、つねに日常的な生活経験をその出発点に置きつつ著者が提示する社会像は、ポスト産業社会論にありがちなその都度の印象的な社会時評を超え、等身大的で手堅い説得力を備えている。このような研究スタイルそのものにおいてすでに、ともすれば過度の抽象性に自閉しがちな評者はいたく身につまされてしまうのではあるが、やはりそんな評者なりの感想はある。以下に二点ほど、コメントしてみる。

本書全体を通じて論及されている主題群・問題群は多様で、本書はそのバランスのよい俯瞰図となっており、その意味で「ポスト産業社会」というタイトルに遜色のない内容を備えている。著者は大筋で、脱産業化へ向けてのシステム変動の内生的要因を産業化自体の自壊-再編成として考えているが、ここにギデンズやベックらのいう再帰的近代化の議論を重ねてみることもできる。脱産業化や脱近代化は、産業化や近代化が孕んでいた「パラドクス」の露呈である。周知のように、ベックは再帰的近代化の徹底とともに剥き出しになる産業化(富の社会的分配)以降の社会像を「リスク社会」(リスクの社会的分配)として描き、「ポスト」特有の不安を診断した。ベックは、生き方のモデル、性別役割分業・セクシュアリティ、職業労働の脱標準化、福祉などの諸分野で経験されつつある変調をリスクの産出という観点から位置づけて、ポスト産業社会の機構をシステム変動のリフレクシヴな展開に見出そうとする。ひとつに評者は、こうしたベックの議論を視野に入れ、リスクの産出-リアクションの継起として産業化-脱産業化を把握することで、本書著者が扱う「脱産業化」の多様な論点に、それらをつなぐ一貫した背景を与えることができるのではと考える。著者が扱っている諸問題がやはり、ライフスタイル、ジェンダー、福祉国家の危機と扶助ネットワーク、エコロジー問題としての福祉…であるということからしても、そして生活システム分析という著者のスタンスへの接続可能性という点からも、リスク社会論的プロットをもう一筋織り込むことによって、著者の扱う問題群のもつ個々の具体性を損なわせないまま、それらをさらに再帰的近代化の文脈に位置づけ、相互関連を見出し、産業化の徹底-自壊-再編成という(パラドクスの露呈)過程に一層内在的な仕方でそれらを配置することができるのではないか。両者がともに産業化の遭遇する実質的な

問題をそれぞれに扱っているがゆえに、つきあわせて考えてみる意義は十分あると思う。

「社会がいわゆるポスト・インダストリー時代に入り、文化がポスト・モダン時代に入ると同時に、知のステータスにも変化が生じる…」(『ポスト・モダンの条件』p.13)というリオタールの宣告がある。また『情報様式論』の著者マーク・ポスターは「ポスト産業社会論」の多くが「言語の問題」を深刻なものとは考えず、結果、ナイーヴな全体化論(その多くは技術決定論的な)に陥っていると批判する。ポスト産業社会論は、産業社会以降に固有の社会の記述に努めるのと同時に、知のステータスそのものに起きている変調(知もまた情報であり、消費される商品であるのだから)もまた無視することができない。ここで「ポスト産業社会論」という言説それ自身が社会の実体的な記述・説明という以上に「遂行的なもの」である、と考えることができる(こうした思考のひとつの可能性を評者は佐藤俊樹著『ノイマンの夢・近代の欲望』での議論に見出す)。「ポスト産業社会論」やその背景ともなるナイーヴな技術決定論の信憑性そのものが、産業社会自身の産み出す「情報」である。このとき、ポスト産業化論は、産業化以降の社会がどのような社会なのかという問いを、「ポスト産業化」をめぐる言説がその(予見の)信憑性を産業社会的機構の内部においてどのようにして産出しているかという問いとともに「二重」に探求することになる。ひとつに脱近代化/脱産業化は、こうした言説分析的な身振りを発動してしまうシステムの変調であるのかもしれない。

たしかに言説還元論も、ただみずからに自閉してしまうだけならば、技術決定論と同じくらいにはやはり平板で不毛なのであるが、言説の問題を無視し、社会をなにか透明な対象のように扱っているかのような観察者の論述はなにか重大な事柄を脱落させる。変化する社会と社会をめぐる言説の変化とが互いを含み合いつつ作動する局面が同時に問題化されるのでない限り、ポスト産業化として見出したい「変調」を十分に捉えきることにはならないのではないだろうか。「ポスト産業社会論」全体は、いまみずからに言説の問題を突きつけてみる必要があると思う。生活システム分析という「方法論」とは別の、もう一段抽象度をあげた理論的考察をさらに本書に求めたくなるのは、評者だけであろうか。しかし「ポスト近代化/産業化」論の困難は、具体的な分析と抽象的な思考のフィードバックという以上の「合わせ技」を強く要請することにある。むろんその困難こそが、新しい可能性でもあるわけだが。

十分に本書を紹介し、また公正に評しえたとはいえないのだが、もとより書評という実践もまたひとつの書物を媒介にした対話の形式であるのだとすれば(たとえ評者がその場合の「良い」対話相手ではなかったとしても)、どこかに話が回収されてしまうような固定化には至らずに済んだかもしれない(評の生命は、不用意な意味の固定化よりはむしろ、読みの可能性を開いたままにしておくことにある、と考える)。逆に言えば、それほどに本書が、問いや検証に開かれうる主題群を幅広い射程の中に位置づけている、ということにもなるのだろう。そうした意味でも本書は、今後更に産出されるであろう「産業化以降」の言説をますます誘発するものとなっている。